

## 第3回木曾地域の高校の将来像を考える協議会 会議録

令和元年12月20日（金） 午後6時00分

木曾町文化交流センター 大会議室

### 【欠席】

加藤晋悟 長野県建設業協会木曾支部長

田屋万芳 木曾農業協同組合代表理事組合長

### 1 開会

### 2 会長あいさつ

○事務局 それでは、初めに当協議会の会長であります木曾町長 原久仁男より御挨拶を申し上げます。

○会長 皆さん、こんばんは。第3回の協議会ということで、大変御多用のところを、また遠路この会場まで足をお運びいただきましてありがとうございます。第2回を7月に開催しまして、これまでの間、各町村の教育長の皆さんを中心として事務局を務めて、それぞれ御意見を伺う時間といたしますか、御尽力をいただいております。改めて御礼を申し上げたいと思います。

本日はそういった御意見を踏まえながら、本協議会の委員の皆さんもそれぞれの意見を聞く機会に意見を述べていただいた方もいらっしゃると思いますし、この協議会の委員として、本日また皆さんからも御意見をお伺いしたいと思っておりますので、ぜひ忌憚のない御意見をいただければありがたいと思います。

そんなことを申し上げて、開会に当たっての挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

### 3 報告

○事務局 それでは、会議次第の3であります。報告をさせていただきたいと思えます。

まず1ページをごらんいただきたいと思います。第2回の協議会の後、8月29日から9月13日にかけて、産業界や同窓会、小中高の保護者、郡内の中学校長に集まっていただき、計5回の「語り合う会」を開催しました。39名の方に出席をいただき、貴重な御意見をいただきましたし、当日都合により欠席された方からも文書で御意見をいただいております。

その折に出された主な意見については、2ページに掲載をしてあります。2校存続について最も多くの意見をいただきました。木曾郡は広く、教育の機会均等や高校選択の面でも2校は必要といった意見や、高校がなければ将来を担う人材が全て外に出て行ってしまうといった意見をいただきました。

それから、2の地元高校の良さ、魅力の発信につきましては、両校とも特色ある学科、部活動があるので、そこを生かした全国から募集するような施策をとった意見。

3の学科の再編と普通科専門科のバランスといった点では、専門科の内容を再検討し、高度な技術を習得できる授業内容を構築し、先駆けとなる専門科を目指す。また、中学生や保護者の要望に応えられた学科編成になっていないのではないかと、木曾地区で普通科を目指すことなく、外へ出る生徒を生んでいるのではないかと、そういった御意見もいただいておりますし、英語に特化した教育など総合学科でもほかとは違うカラーを出せるとよいといった御意見もいただきました。

また、少人数学級につきましては、35人学級あるいは30人学級といった高校をつくってもいいのではないかとといった御意見もいただいております。

続きまして、3ページをごらんいただきたいと思います。第2回協議会で皆様から郡外への進学者数や、郡外から青峰高校や蘇南高校に入学した生徒数、その主な理由について知りたいといった御意見がございましたので、その資料について御報告をさせていただきます。

**○事務局** 1番目は平成30年度末、本年度高校1年の皆さんの郡外進学者数と主な理由でございます。各中学校の進路担当者から御回答いただきました。公立普通科以外への進学者については、郡内の高校にはない特色を求めて進学している様子が見えられます。公立普通科への進学者については、郡内でも受け入れ可能な部分もあると思われま。

2番目が木曾青峰高校、蘇南高校に郡外から進学してこられた生徒の皆さんの数と主な進学理由でございます。各校の校長先生に御報告いただきました。例年30名から40名、各学年の生徒さんが郡外から見えているということでございます。

4ページをお願いいたします。2017年、18年の郡外への出入りをもとに、2025年、2030年の入学者数の予想を計算してみました。出入りの割合が今と同じように推移した場合には、2025年には2校合わせて188名、2030年には149名ほどの生徒さんが入学することが予想されます。

## 4 議事

### (1) 木曾地域における高校の学びのありかたと具体的な姿について

#### (意見交換)

○事務局 次に進めさせていただきます。協議事項に入らせていただきたいと思います。議事の進行につきましては、設置要綱第4条第2項の規定によりまして、原会長をお願いいたします。

○会長 お手元の次第のとおり、高校の学びのあり方等具体的な姿についての意見交換をということでございます。報告の中でも2ページに主な意見ということで記載をいただいております。たくさんの御意見をいただいたので、こういった要約がいかにどうかというような、そういった疑念をお持ちの方も場合によってはあると思いますが、そんなことも含めながら、ぜひ御意見をいただければと思っています。

5ページのところに議論のテーマということで、旧第10通学区の再編計画の方向性という部分を参考に載せていただいておりますし、また発言していただきたいポイントということで、新たな学びの推進であるとか再編・整備計画、そういったところで御意見をいただきたいということですので、2ページの主な意見と重複しても構いませんので、全員の皆様から御意見をいただければありがたいと思いますので、これから順次御発言をいただきたいと思います。

○委員 私は高校生を受け入れている、育てている立場といたしますと、多様な高校生が育つということに、多様な人々の中でコミュニケーション能力を培い、さらに人間性を培っていくということが基盤にありますので、多様な学びの子が来てくださるということに魅力を感じています。

青峰高校、蘇南高校、それぞれ特色のある、魅力のある高校をそのまま残していただいて、その中で大事に育てていただいた生徒さんをうちの学校へ進学させていただくことに、学校の立場としては、そのようにしていただくありがたいと思っています。

学校の者ではなく、一個人としての考えでいきますと、少子高齢化はもう待ったなしで、大変厳しい状況であるということはひしひしと感じています。その中で、教育を合理的な考え方で割り切るということは難しいかもしれませんが、私個人としては、さらに郡外へ出て行く生徒さんのことを含めると、後には149名までという数字を見たときに、2校存続ということはかなり厳しい状況ではないかと。私個人としては感じました。

学校の者としてという立場と、それから個人としては少し結論が違いますが、そ

のような感想を持っています。

○委員 意見というよりも意見聴取の機会等で聞いた感想のようなものになってしまうかもしれませんが、これだけ広い面積の旧第10通学区の中に高校が2校しかない。学びの機会をどう保障していくのかという皆さんの御意見で、ポイントにあるような新たな学びをどう推進していくかというところは、率直にもうどうやって守っていくのかというあたりの御意見になっていたと思います。

ストレートに学校の再編・統合ということに関しては、もう大多数の方が存続を求めておられて、県教委の再編の基準の中でも中山間地の存立特定校というような基準も設けられているわけですし、県境にある学校をきちんと県も検討して学びの機会を保障していく、これは本当に必要なことですので、2校存続が大多数の意見であり、私もそのように思っています。

ただ、2校存続というのを前提として考えていきますと、今も必ずしも学校規模はそれぞれ大きくない中で、もっと小さい規模の中で生徒一人一人に合った学びを用意しなければいけない。学力も幅広いですし、目指す進路もまちまち。また発達障がいの子供さんも多分増えている。そんな中で今も学校の中では習熟度別であったりとか、コース別に少人数であったり個別指導もしていただいているとは思いますが、さらにもう一工夫、これが例になるかどうかわかりませんが、例えばこういう授業が必要だという子供にはICTで遠隔授業をやるとか、学校が連携して部活動を一緒にやったり、学びを一緒にやったりするような何かもう一工夫がないと小さな規模での学校として成り立っていかないと思います。

それからもう1点だけ、学科についてですが、蘇南高校で10年の実績を積まれてきている総合学科、1年次は皆さん同じ教育をして、その中で自分のキャリアを考えて、2、3年次は系列で学ぶ。これは学校規模が小さくなる中で、そこにしか高校がない、何か1つの特色を学校としてもう全部打ち出すというわけにいかない中では、これは非常に有効な学科のあり方だと感じております。

ただ、木曽青峰について言えば、木曽山林高校から引き継がれてきた森林系の学科、これは恐らく県下唯一の特徴ある学科ですので、そこのところは大事な伝統といますか、財産として大事にしながら学科というものを考えなければいけないと感じています。

○委員 これまでの中で出た御意見を一通り目を通させていただいて、なるほどと思う部分があったりですとか、ひょっとしたら実現が可能じゃないかというようなことがあったりしました。

今後の進め方の部分で出てくるかとは思いますが、QCの手法といいますかマトリックスに落とし込んで、これはできる、これはできないというものを具体的に消し込んでいくという作業がこれから必要になってくるかと。これだけ多くの方々に御意見をいただいている中で、ただの意見で終わらせるということは、これはできないところまで来ていると思っています。

私は、木曾の民間企業に勤めているということもあって、製造業なんです。青峰高校であったり、かつては山林高校にも、私どもの従業員を講師として派遣して、例えば公共的なカリキュラムを持たせていただくとか、そういった提案であるとか、もう1つ大事なものは、渦中にある生徒たちが自分たちの置かれている環境であるとか今後ということについてどう考えているのかということの意見交換をする場であるとか、そういったものを求めて、青峰高校の校長先生のところにも生徒たちと接触する機会を持たせていただけないかというような提案をさせていただいているんです。なかなか実現に至っていませんが。

そうやって例えば地元の企業であったり、PTAの立場であったり、いろんな立場からアプローチをしてみるんですが、なかなか実現していかないという歯がゆさというのはあるので、せっかくこういった会議を持たせていただいているので、何かしら実現に向けた前向きな形をとって行っていただきたいということが1つ。

もう1つは、既に少子高齢化が進んでしまったということに対する対照的な議題になっているんですが、これをそのまま放っておいたら確かに2030年には何人しかいないというようなことになってしまうのですが、そのさらに10年後、20年後ということを見据えたときに、どうやってこの地域に人を呼び込むのかということの議論が並行して必要なのかなと。この議論をただ何もせずに進めていっても、結局尻つぼみで終わっていくという形が見えてしまいそうな雰囲気があるものですから、例えば寮を用意して全国に募集を募るというような御意見もあるんですが、こういうことも実現していかなければ、この地域そのものがもう立ち行かなくなってしまうということになると思いますので、教育委員会として学校をどうしていくのかということと同時に、地域として、自治体として、この地域をどうしていくのかということの議論がこの中にもないといけないと感じております。

いろんな立場からいただいた御意見ですとか、ここまでの経過、推移というものを見させていただくと、机上の議論で終わってしまっはもったいないという印象がありますので、ぜひ具体的な形にしていく今後のスケジュールというものを示していただければと思います。

○委員 今回、いろいろな会議に出させていただく中で、皆さんどこの市町村の方も苦勞されているというのは少しわかりまして、ここで今一番先ほどの流出している人とか、郡外から来ている人の資料を見せていただく中で、数字的なことを見てしまうと、どうしても少子化が進む中、人口が減るんだと。これはもう仕方がないことだというのはわかりますので、このところで自分が少し思ったのは、木曾の子たちが木曾に残って少しでも、残るといふか就職とは別で、進学とか要は流出の面を少しでもとめられたらと感じました。

ただ、その中で概要のほうですが、資料の中で木曾地域の子たちは下手すれば保育園から中学校、高校まで一緒になってしまう。そういうところでのコミュニケーションのあり方がとても難しいという資料がありました。これは痛切に保護者の方と話をする中ですごく伝わっている内容です。特にお母さん方なんかはそういうのをうんと感じていて、同じグループから出たいんだという子たちのことも考えないとけないということを言っていました。

そこへ自分たち大人がどこまで携われるのかということになったときに、やはり2校存続はもちろんなんですが、そういうのを変えていかないと、いっぱいいっぱいになって流出して行ってしまいます。そういうこともあるのかと理解しながら、どうしても流出を少しでも防ぐのと、あとは人数を呼び込むこと、そうすると少しでも課題が見えてくるのではないかと考えています

自分もほかの会議に出させてもらった中で、中学校の校長先生、小学校の校長先生に会うことができました。やはり皆さん立場がそれぞれあるので、校長先生たちというのは立場があって大変だと思うんです。

ただ、どこかで共通意識を持った課題を1年ごとでもいいですが、流出も含めて市町村単位で考える課題として、流出もしくは転校、増加について共有する場所が市町村ごとにあってほしいと。今後も大事ですが、今現在いる子たちのことも含めて考えていかなければいけないと思います。

自分は蘇南高校なんですが、娘は3年生です。とても高校のよさ、蘇南のよさ、青峰は青峰のよさが多分わかっていると思っていますので、そのアピールの仕方を保護者も少し、自分はもうアピールしていますけれども、そういうアピールの仕方を少しずつでももっと市町村の中で共有できればいいと感じています。

○委員 意見聴取の結果を見せていただいて、まさに本当にこのとおりで感じています。みんなの総意としては、やはり2校存続、これなのかなという気がします。地域の活性化を考えると、2校存続というのは絶対なのかなという感じを受けてい

ます。

ただ、片や少子高齢化、子供が減っていくという中と、郡外の進学者、こちらに関してはまだなかなかとめることができないといえますか、生徒たちの選択の自由ということがありますので、この先ずっとついてくるものなのかなと感じています。

そういった中で、当然青峰、蘇南、いろいろ魅力ある学校づくりというところでも取り組んでいただいていると思うんですが、限界もあると思います。

そういった中で、少人数でもやっていける体制。その詳しいところはわかりませんが、学校から人数が減ったメリットというのは当然出てくるといえますので、そういったメリットを探しながら、体制づくりというところで議論していくのがいいと感じています。

私は子供が青峰にお世話になっていまして、今中3の子も青峰を希望していますので、親としては木曾に残ってほしいと思っています。何とかそういう体制づくりというところで話ができるようにと思います。

○委員 いろいろなものを見せていただきまして考えさせられました。私個人的ですが、兄弟のほうにも青峰高校に今在学中ですし、卒業した子もいます。総合学科で大きく考えてきたときに、今は高校を卒業して大学進学したいと思っても、今はお金がなくても進学できるような世の中になっています。それから、子供が働きながら返していくようなそんな世の中になっていまして、要はどこでも行けるような環境になってきていると思います。

そういう子供たちがこれから大きくなって行って、3ページにあるような郡外へ進学していってしまう子供たちというのも兄弟がいたり、周りに相談できる人がいると、どんどん違う方向へ大きな目で見られるような子供たちが増えていくような気がしますので、できることならば、これから人数が少なくなっていく、2校存続というのも、それが一番大きな課題だとは思いますが、できれば特色ある学科といえますか、もう少ししっかり森林環境科ならもっと突っ込んだような、特色ある学科というのもつくってもらったりして、これから10年後ですか、そういうところも見据えてやっていただければと思います。

○委員 私も自分の子供が高校生が1人と中3の子がいます。子供たちの声を聞いたときに、松本というほうを目指している子もいますが、私の中ではもっと勉強をしたい子、部活動とかでもっと強い私立の学校に行きたい子が松本とかへ行くんだなという意識でいたんですが、必ずしも全員がそういうふうに行くかということ、自分とはとにかく木曾に残りたいということで地元の高校を選ぶ子もいると聞いています。

中3の子たちも自分は蘇南に行くんだとか、青峰に行くんだという気持ちを強く持っている子もいます。

郡内に2校しかないという少ない選択肢の中でも、自分なりに希望を持って進学している子もいるということを見ると、高校の魅力をそのままに2校存続していただいて、子供たちが2校という少ない数ではあるけども、自分なりの選択ができるというような学校で残ってほしいと思います。

今の子供たちって、小学校も統合になってきています。中学校に行っても、ずっと12年間同じメンバーでやってきているというような子たちもいて、統合というのはわかるんですが、効率よく進めたいというのもわかるけれども、教育ということにそこまで効率化を求めなくてもいいのではないかという気持ちがすごくあります。

少人数ということも出ていましたが、木曾郡、こんな田舎のと言っては失礼ですが、学校には不登校の子たちもとても多いということを知っています。悩んでいる子たちもたくさんいて、そういう子たちにも対応できるような、ニーズが多様だと思うので、そういうところにも力を入れていくことが、子供たちがそこに行こうという気持ちが持てることになるのではないかと思います。基準がいろいろあるみたいですが、それは何とか郡として頑張っていくとか、そういうところにも力を入れているんだよというところをもっと発信していけるような学校であるといいと思います。

専門科という話もありましたが、私は木曾郡の出身ではなくて、よそから来たんですが、本当にここが好きで、本当にいいところだと思っていて、こういうところに私は住みたかったんだといつも思っているんですが、地域の力というのをすごく感じています。子供たちに対しての周りの大人の思いとか、例えば地域の行事にも子供たちが小さいころから参加してきていて、そういうことが大好きな子供がいっぱいいるとか、そういう地域の力というものをもっと高校に注げるような、例えばさっきもお話が出ましたが、専門科にどんどん地域の力を注いでいけるような学校というのもすてきじゃないかということと、地域の魅力自体がアップしていかないと、高校に呼び込んだところで終われば出て行ってしまうとか、そんな気がします。

○委員 私もこの資料等々を拝見させていただきまして、いろいろ皆さんから多く上がっている意見は、2校の存続というところが非常に強い意見かと思えます。

その中で1番は木曾地域の現状を考えたときに、少子化も確実に進んでいますし、



郡外の流出の状況も、先ほど資料の中で確認させていただいたところなんですが、これから地域にとって高校というのは、今の高校生が地域の中で活躍をしていただいて、木曾地域の将来、少子高齢化を見据えたときに、非常に大事な存在であることはまず間違いないと思いますので、そちらについては、今こういう協議会の場でどういう方法をとっていったら2校存続ができるのか、できるだけそういう視点で考えていかなければいけないと思っています。

郡外に流出をしているという話も出ていますが、郡外流出には公立高校でない部活動であったりとか、青峰高校、蘇南高校でお子さんのニーズが満たせないものもあるんで、それについてはいたし方ない選択肢なのかなとは思っているんですが、仮にそういう形の郡外流出があった場合でも、何とか2校、木曾郡内の高校生の選択肢をより広めて残していくような形をとっていければ一番いいと思っています。

最後に、今回こういう協議会に参加させていただきまして、多くの皆さんからいろんな意見が出された中で、例えばこれから蘇南高校、青峰高校が取り入れる可能性とか、いろいろこうしたらいいのではないかというものも恐らく出てきたところかなと感じています。それらが今後の高校の将来像にもつながっていく部分だと思いますので、そういった意見をしっかり酌み取りながら、課題や可能性を追っていかないといけない部分もあると思いますし、資料の一番裏面に全体のスケジュールということで県教委の方からも示されているんですが、非常に大事な議論をしていかないといけないと思うので、スケジュールはスケジュールとして、しっかり自分たちの将来の高校像を考えていかないといけないのではないかと考えているので、スケジュール的なものも先延ばしにはできないですが、柔軟に対応していくことも必要だと考えています。

○委員 子供が少なくなるというのは大変なことだと思っています。とても暗い話なんですけど、これを反対に私たちは、木曾は最先端で行くんだという心構えで行ったらいいと思います。

どこも少子高齢化は課題なんですけど、これを最先端と捉えて、私たちがやってくんだという心意気を持って、暗い話ではなくて明るい話に転換していただけたらと思います。子供が少なくなるので、私も1校でもいいのかななんて思ったんですが、皆さんの御意見をお聞きする中で、木曾に2校は必要だと思いました。そして、同じ長野県なので、教育の質を落としていただきたくはないというのが親御さんの切実な考えだと思います。

私も木曾高と青峰で子供たちがお世話になりましたが、松本に行きたいという意

見はありました。でも、通学が大変ということで諦めてもらいました。諦めるというか、木曾高校もすごくそのころは進学率も高かったので、ここで十分ではないかということで納得してもらいましたが、そういうこともあって、子供に影響を与えるのは親だと思えるんですね。あと兄弟とか身近な人たちからの影響をとっても受けやすい年齢なので、ここで話し合いをして、青峰も蘇南もすばらしい高校だと私も本当にしみじみと感じていますので、それをもっと保護者の方、地域の方に浸透させていただいて、ここの協議会だけではこの課題はとっておさまり切らない課題だと思いますので、市町村、地域の方を巻き込んでやらないといけないと思います。

やはりお金がない、子供がいないではなくて、前を向いてだったらどうするかという明るい未来のための考え方を打ち出したらいいと思います。

こちらの北と南の方々の御意見も伺ったときに、北のほうがとても暗い会議だったような気がするんです、印象的に。南のほうへ行くと、みんなこうしたらいい、ああしたらいいというふうに活発な意見が出て、とても南と北の受けとめ方の差を感じました。

木曾は広いので、南と北では随分御意見が違うかと思うのですが、そこを集約して、木曾郡が1つになって、この協議会をもとに発展していったらいいと思います。

地域に愛された子供は、地域に帰ってくるという言葉をいただいたことがありますが、育成会でも地域の子たちを本当に一人一人、顔と名前を覚えて育成しているわけですが、その子たちが木曾に帰ってくることが私たちはとてもうれしいことなので、皆さんがそんなふうに子供たちに接していただけたらと思います。

**○委員** 本日用意していただきました資料の2ページの3番主な意見にまとめられているこの方向に尽きるのかなというのが、まず私の思いであります。

学校の存在が地域にとって、その時期に学校を選んだことがどれだけ地域にとって大事なことなのかという視点で今回は意見をまとめていただければと思います。

それから、裏面の3ページを先ほど説明していただきましたが、郡外の高校へ流出をしてしまう子供たち自身の理由と、逆に郡外から進学をしてくる子供たちの気持ち、実はこれは表裏一体ではないかと私は思っています。実は私立の全日制のところを見せていただきますと、進学の個別支援が充実しているとか、個性に合わせた教育があるということが載っていますが、実は先日も蘇南高校の総合学科の発表会に出させていただきましたが、まさにこのことが充実していることが私にはよくわかりました。

ただ、残念ながらそれを南木曾町の小中学生はわかっているのかもしれませんが、

北部の中学生、小学生はわからない。私はあの会に出たときに、3校の中学校長がいたんですが、この発表会にぜひ郡内の中学生を参加させたいと、そんなふうにも思いました。そんな点、またぜひ中学校としても勉強して取り上げることを考えていきたいと思っています。

○委員 木曾郡の小学校長会の中では、地域のよさを感じる子供たちを育てたいということで、各校地域学習を進めているという状況です。

私が1つ考えているのは、地域のよさを知るだけではなくて感じるためには、その地域で働いている大人と子供たちがかかわる中で、そのよさを感じるのではないかと考えています。今、高校でも特色ある教育課程をつくるために、地域と一緒に教育課程をつくっていくという動きがありますので、ぜひそれを進めていってほしいと思うことと、小中高でのつながりが高校の探究化につながるような、そういった小中高連携したようなつながりをつくるようなものも、やっていかないといけないということを考えています。

また、多様な学びとか学校の多様性ということが話題として出されています。小学校も考えていかないといけない。保育園、幼稚園から小学校へ来たときに、小学校はこうでなければいけない、小学校はこういう形でなければいけないというようなものから。今はそれを問われている段階であるのではないかと思います。

高校も同じで、高校はこういうところであるべきだということ少し脇に置いてから、そういった魅力ある高校づくりというものを発想していくということも必要なのではないかと思います。

○蘇南高校長 1回目、2回目、委員として参加させていただきました。そして、5回の意見聴取も全て私は出席をして、いろいろな方面からの御意見あるいは要望、あるいは質問も含めてお伺いしました。

そういう中で私が考えたこと、校長としてという立場もありますが、三十数年間高校教育にかかわってきた人間として感じたことも含めてになりますが、スケールメリットという言葉はやはり考えていかないといけないことかと思えます。規模の利益というふうに訳されるかと思いますが、これは大きければ大きいほどメリットがあると、利益があると。経済的な用語からいくとそういうふうになります。

確かに松本方面、あるいは本校の位置から見ますと東濃あるいは中濃のほうにも私立高校があって、そちらのほうにも行っております。そういう大きな高校のほうは何らかのメリットがあるよという考え方、それも否定しませんし、昨今の教育の流れや、あるいは本校が今置かれている状況、80人募集をしておりますが、総合

学科になって11年目、80人を満たしたことは一度もありません。ゆえに、スケールデメリットのほうが多く見えてしまうわけです。

例えば、それはどれだけ選択科目を置けるか。これはやはり教員定数の問題で少なくなってしまう。ところが、人数が少ないということは、それだけ生徒にある意味教員の側から手が入る。個別指導ができるということがあります。

私は蘇南高校以外での勤務は大規模校ばかりです。1学年10クラス、9クラス、8クラスというようなところで勤務してきましたが、蘇南高校のいいところは、子供たちのところに手が届くというその辺かと思っております。それが個別最適化、最近そんな言葉が教育の面でも言われるようになりましたが、それに結びついていくのではないかと。

高校の授業というと、40人もしくは昔は45人でした。先生が一生懸命しゃべって、板書をして、それを写すというのが今もまだ高校の授業のイメージとしてあるかもしれませんが、本校ではもうそういう授業はほとんどありません。人数が少ないので、先生たちが中に入っていきます。グループワークもできます。あるいは最近ではICT、電子黒板等を入れていただきましたので、そういったものをフル活用するので、板書をとるなんてことはありません。必要に応じて生徒がとる、もしくはもう先生のほうでプリントを先に配ってしまう、あるいは後から配る、そんなふうに、生徒数が少ないからある意味個別最適化の授業ができ上がっているのかと思います。

それからこの先、今、本校は総合学科で3つの系列を置いてありますが、それは現在のニーズに従って置いてあるものです。ところが、10年、20年先はどういうニーズに変わっていくかわかりません。その場合には、今度はそのニーズに合わせていく、そういったことができるのも個別最適化かなと考えています。

そこで登場してくるのが当然ICTを使った遠隔教育だと思っています。遠隔教育で地元の資源、あるいは教員だけでは足りない部分を遠隔で外から補うことによって、より個別最適化の学習ができるのではないかと。

個別最適化の利点は2点あります。1つは、生徒個々に応じた教育ができるということと、生徒のニーズもしくは世の中のニーズ、変わっていくニーズに対応しやすい。それができるのではないかと考えています。ただし、いいことばかりではなくて、やはりスケールデメリット、これの1番は部活動だと思います。この部活動に関しては、今年話題になっているラグビーは15人です。サッカーは11人です。野球は9人いなければなかなか成立はできないです。その部分は幾ら少人数でいい

ではないかといっても、これは厳しいものがあります。それをどうしたらいいかという、地域に学校という垣根を取り払って、地域で1つのクラブなり、そういった集団、これをつくっていく必要があるのではないかと。ここにオール木曾という部分が小中高と出てくれば、部活動で外に出て行く子たちもいなくなる。全くいなくなるわけではないと思うんですが、少なくなっていくと思っています。スケールメリット、デメリットという、そんな観点から私の感じることをお話しさせていただきました。

○木曾青峰高校教頭 私も意見聴取に1回は出ささせていただきました、本会は初めてです。まずは、木曾の地域ということなんですが、先日、本校にカナディアン・インターナショナルスクールの生徒さんたちが来ました。本校に寄ってくれて、生徒と交流があったんですが、そのときに話を聞くと、インターナショナルスクールの生徒は世界、アジアだとかいろいろ希望をとって修学旅行に行くんですが、日本の中でも木曾路はすごく上位の人気だったということをおっしゃっていました。35人ほどが、それから引率の先生も来られて、本校ではちょうどインテリア科の生徒の実習の授業でしたので、そこで一緒に作業をすると。そうすると、生徒は正直英語が苦手で、最初はどうかというような動きもあったんですが、今は本当にスマホで翻訳ができたり、それから作業をするということでコミュニケーションがとれたり、最後は同じ高校生同士なので、抱き合ってたまたかというような姿が見えました。

木曾の生徒たちにもそういう刺激というものを、地域の大きな財産があるんだなということを理解しましたので、それを生徒たちにつなげていって、学校の中だけではない学びを伝えられたらなということも感じました。

地域への就職ということで話題にもなっていますが、本校は、理数科は大学進学ということで進学して、その先は全国各地等で活躍という形がずっとありました。ただ、昨年度から1年生は、理数科も普通科も、森林環境科もインテリア科の生徒も、みんな地元の企業の説明会を聞くという試みを始めました。来年度も予定ですが、本校、それから蘇南高校の体育館等にできる限りの企業さんに来ていただいて、高校生にアピールしていただき、また高校生に地元の企業のよさに触れてもらうような機会をとという形で動きも出ています。

いろいろな形から、地域の人材、地域の産業に合うような生徒たちを育てたいという形でやっていきたいと思うのですが、資料の3ページで先ほども出ていますが、郡外に出ているというようなところで、まだまだ私立のところですが、進学の個別

支援とか個性に合わせた教育があるというところを理由にされているあたりは、青峰もアピールも含めてまだまだ取り組むべきところはあると感じています。

ただ、地域の方や企業の方が高校生と話をしたいということがありましたが、学校だけというところでは、偏ったアピールであったりとか、ひとりよがりなアピールになる可能性もあるので、地域の皆さんの御意見もいただきながらと思っています。

最後になりますが、高度な産業教育を推進する高校ということで来年度から実際に動き出します。森林環境科、インテリア科、本校に入って3年間学ぶわけですが、その後の学びを長野県林業大学校や上松技専、もう1つは就職をして、その企業に籍を置きながら林業にかかわるような職種の他の企業さんにインターンシップへ行ったりという形で、将来的に地域の産業になってくれる生徒を育てるようなシステムということで、今動き出しているというか、構築しているところです。

もちろん、それらのことは森林環境科、インテリア科だけではなくて、最終的には理数科、普通科の生徒にも還元できるところは還元していくことで、また学校としてのアピールもしていきたいと思います。

○委員 本日は、今まで4回開催した「語り合う会」の御意見を参考にしているいろいろと今お話を聞いているんですが、その中で魅力ある、または特色のある学校の推進ということ、それともう1つ、再編・整備計画、これは非常に一緒に考えると難しい問題だと思います。また反面、これは非常に関連のある話で、避けて通れない、両方だと思います。

そこで、先ほどから皆さん方の多くの御意見をいただいておりますが、やはり特色ある、魅力のある学校でないと、郡外へ流出していってしまうということ、これは2校の存続に直接かかわりあることですので、特に私は産業界の専門から申し上げますと、今、木曾青峰高校は森林環境科とインテリア科という専門学科があるんですが、木曾山林高校というのは全国募集もしていました。特に呼び込みの面では、専門科を中心にした全国募集をして呼び込みをしていかないと、恐らく難しいのではないかと。

それには白馬高校の例も出まして、全国募集した場合の宿舍の件が話題になったということでお聞きしていますが、白馬村、また小谷村ですか、行政がこの費用を全額負担して呼び込んでいるというようなこともお聞きしていますが、青峰高校には立派な寮が、これは以前に統合したときに全国募集をして、全国から呼び込むという立派な寮ではないかと私は想定していますが、これが相当空いてしまっている

というようなことですので、そういう心配事は解決できるのではないかと思います。

またもう1点、インテリア科に過去から大変遠方から通ったという例もあるようにお聞きしています。ぜひインテリア科、これからは女子も森林・林業に携わりたいという方が非常に多くいますので、今一番女子の呼び込みに対しては、寮の問題があると思います。

そこで、以前にも申し上げましたが、女子寮をつくる。今、私は林業大学校のグレードアップにもこういう会議の中で携わらせていただいています、林業大学校の男子寮が今年どうも予算化されて建て替えるというようにお聞きしています。教育には垣根はあってはならないと思いますので、教育課と林業大学校は林務部ですが、そんな折に女子寮も以前からいろいろの角度でお願いしていますので、つくって呼び込みをしていただければと思います。

林業大学校の話の中では、私はこういう話を高校改革の中で申し上げていると言うと、全然聞いてないというようなことですので、垣根を越えて連携をして、子供の教育には垣根をとってやっていただければ、なお長野県の産業や教育にも関与してくるのではないかと思いますので、お願いしたいと思います。

それから2校存続、当面はまず努力をしながら存続をしていくというのが皆さん望んでいることですので、前向きに捉えていかなければなりません、魅力と特色がないと流出をしてしまうということも考えながら、いずれは統合も考えないといけない時期があるのではないかと思います。

そこで、統合がどういう形になるにしても、木曾谷は大変南北に長い、面積の広い地域ですので、皆さん方の御意見を聞いていると、通学に非常に不便だというお話をお聞きしてきました。

以前から私も高校生の通学するJRのダイヤの改善とか、また増発してほしいという要望もしてきましたが、今のJRでは一切多分だめだと思います。県教委のほうでもし統合ということがあったときに、この木曾地域を考えたときに、JRの合間の時間帯にバス運行とか、そういうことで支障なく通えるような方策を考えていただけるのかどうか、そんな点もこれから詰めて、本音でいかないと、この話はなかなか進まないと思いますので、ぜひお願いしたいと思います。

○委員 この会議に出させていただいたり、あるいは意見聴取、それから概要版とかを見させていただく中で、会議に出席するしない、こういったところにメンバーとして入っている入っていない、そういったものにかかわらず、この高校の再編問題というのは、住民の中の非常に大きな課題、問題なんだなというのを改めて

感じさせていただきました。

恐らく県の再編基準というのは、大きな社会変動というか変化がない限り、そんなには変わらないだろうと思いますし、そういう再編基準が出されていますので、そのとおりに今後も多少何がしかの文言が加えられながら今の基準がそのまま進んでいくのかなという感じはしているんですが、やはり、皆さんの多くの意見をお聞きする中で、最低限2校存続というのは本当に最低限の要望なんだろうと思います。

ちょうど今、ケーブルテレビで蘇南高校の研究発表をやっているんですが、昔と違って、今の高校も本当に地域課題というものを自分たちの中で考えて、どうしたらこういった課題、問題が解決できるんだらうと一生懸命取り組んでいただいている。地域を意識した授業だとか教育がなされているんだとつくづく思います。

そういうことを考えると、小中高、高校生、小学生が自分の家庭内にいるいなくにかかわらず、地域全てでこの地域の全体的な問題として取り組んでいくべき課題だと思います。そのような形で要望書がまとめればいいと思いますが、そういった気持ちを県も理解していただいて、基準は基準としてこういった地域の思いを受けとめていただければと非常に感じております。

○委員 先ほど来出ております蘇南高校の総合学科の総合研究の発表をこの間行いました。年々大変内容が充実して素晴らしいものになっています。

その中で、子供たちも地域からテーマを振っていただいて発表している姿がありました。また、直前には学校に私も呼んでいただいて、町の実情をお話ししたり高校生と意見交換をする、そんな時間もありました。

その中で思うのは、もう木曾の町村はどこも子供が少ない、人口が減っているという、そういう地域の課題を持っています。そういった課題を高校生の段階から一緒になって考えてもらう。そういったことを積極的に授業としても取り組んでいただきたいし、私たちも高校生に投げかけて、一緒になってこの問題を解決していこうと。そして、お互いが頼りにする中で、地域の中で高校の存在感というものをもっと浮き彫りにしていける、そんなことを特色にしていかななくてはいけないのではないかと感じたところでもあります。

それから、再編・整備計画につきましては、これは南木曾町という県境ということがあるわけですが、仮に町に高校がなくなってしまうと、青峰高校へ行く子も増えますが、それ以上に県外へ行く子が多くなる、かなりの子が県外へ行くことは可能性として高い部分があります。

そうしますと、そういった子が大きくなっていくと何が起こるかという、もう



精神的に長野県というそういう意識が薄れていってしまっていて、将来南木曾という町そのものが解けてなくなってしまっていく、そんな危機感を持っております。

そういった意味で、南木曾町としては、たとえ学校が1クラスとなっても高校は必要だと。また将来、県で面倒を見れなくなったとしても、町としては高校という場を守っていかなくてはいけない、そういう認識でおります。

それともう少し今度は現実的な話になります。先ほど小幡校長が言っていた進路決定の大きな1つの理由になっている部活の問題ですが、その対応として、1つはこの地域の中、木曾全体で取り組めるそういう場をつくっていく、それが大事だと思います。

もう1つ、当面の対応として、今は合同でクラブをやるのはなかなか難しく、特に大会なんか木曾という両校のチームということで出られないと思うんです。足りないところ同士でくっついてしまう、どこか全然違うところとくっついて出るというようなことになっていると思いますが、そういったことの特例だとか先進的な取り組みということで認めていただいて、少しでも外へ出ていく子を減らすと、そんなことができればと思います。

○委員 今皆さんのお話を聞いて、経済界、一番最初の8月29日ですか、経済界、それから産業界、いろいろ意見をお聞きしました。その中で、商工会といっても商業事業者から大企業まで会員でいるわけですが、木曾という地域の中で2校あって、そして地元の企業、有名な企業もたくさんあります。そこへどうしても就職をしていただきたいということは、どの会長さんからもお話がありました。

今正直言って、高校ばかりではなくて、地元の企業をいかにして存続していくかというのも商工会としても大きな問題の1つに上げられております。個人企業は後継者もない、あるいは大企業、この間もある事業所の方ともお話をしましたけれども、地元で就職をしていただけなかったら、もう企業は人口の多いところへ撤退するというような話まで聞いております。これは商工会としても深刻な問題でありますので、木曾では何としても2校存続して、地元の企業に就職してもらいたいというのが希望であります。

また、私個人ですけれども、今年孫が青峰高校を卒業しました。この間時間があって、帰宅したときに今こういう問題で話をしているということで話をしたら、この2ページの2番のところにありますが、このことを言っていたんです。昔の山林高校と同じで、全国で募集して、全国から集めたらもっと活性化につながるのではないかということで、全く同じことを言うんだなと、今の子供たちもそういう意

見があるんだなということをつくづく感じました。

何としても地元の企業を存続するには、高校も2校だけは残して存続していつてもらいたいということをお願いいたします。

○会長 時間に大変御協力いただきまして、ありがとうございます。私も一言だけ、皆さんの発言された意見とかなり重複する部分もありますが、私の考えとすれば、今回のテーマの中にも特色ある学科ということが出ますが、現実的には難しいという思いがあります。勉強が嫌いだけれども、この時代だから高校くらい出ておくという気持ちで高校へ進学する子も多分いると思いますので、そういう子も卒業するときには、この高校に入ってよかったという、そういう思いで卒業していけるような、そういう教育も特色ある高校だろうと思いますし、逆に先ほど来出ておりますように、郡外へ出て行く子供たちの中には、上の高い大学を目指すということで出て行く子供たちもいますので、そういうところもどう対応するのかという部分では、いろんな目的がある中で、総花的に全部応えられるような高校に果たしてなり得るのかとかというところも、私は現実の課題としてあると思いますので、そういう点では、ある程度地域とすれば妥協せざるを得ないところもあるのかなという、そんな思いもしております。

また、専門科といいますか、例えば森林環境科の関係も、地域の皆さんの中での評価は、もう林業を教える先生がいなくて、実際には農業系の先生たちがやっているので、昔の山林の卒業生から言わせると、今は野菜をつくっているのかみたいな、そういう批判めいた話が出てしまっていたり、今の時代に即した林業の教育をどう進めるかというのは非常に難しいと思っていますし、地域の林業の状況を見ても、今まではどちらかという山を育てるという時代でしたが、これからの10年、20年先は、今度は林業としてなりわいができるといいますか、木を切って、それを売ってさらに新たに植えるという、そういう時代がもうすぐそこに来ているので、そういう中でどういう教育ができるのかというところ。

さらに木曽町の町内に林業大学校という専門の大学校があって、そのグレードアップということで、さらに3年生を目指したらどうかという検討も進められていますし、また伊那谷へ行けば信州大学のそういう学校もあるということで、そういう方向へ進んでいこうとする子供たちを高校の時代でどう育てるのか。逆に、中学の時代からそういうところを目指していく子供たちが果たして出るかどうかというところも、現状とすれば大変な部分もあるのかなという、そんな思いもあります。

いずれにしても、子供が減っていくという状況の中で、先ほど来いろんな御意見

もいただいておりますが、部活のあり方だとか、学科の中での勉強のあり方だとか、体制的なものもしっかりと考えていかなければいけないでしょうし、逆に、地域の中で地域力をというような御意見もありましたが、どこまで地域の皆さんと高校側がといいますか、県教委のほうで門戸を開くかという部分もあるのかなど。そこら辺は、私ども地域の責任でもあるのかと思いますが、そんな感想といいますか思いも一言だけ言わせていただきました。

○委員 質問なのですが、一番最後のページの今後のスケジュールを見させていただいたときに、2020年9月がこの会議体の締めというような形になって、ここにいる皆さんはPTAとか学校の先生も含めて、メンバーがこのとおりでではないと思いますが、その辺はどう捉えていますか。例えば、私はもう来年の4月で終わりますし、先生方も転勤されたりとかあると思いますが。

○会長 当面の目標を後ほどスケジュールとしてお示ししますが、来年中には何とかまとめて、県へ意見書といいますか、地域の声として上げていきたいというスケジュールですので、できれば、特に転勤のある方とかPTAの関係の皆さんは、今の役職から降りられる確率が高いと思います。ただ、この協議会については、できれば全部まとまるまで肩書が降りても継続していただければありがたいと思っています。転勤でいらっしゃらない方は、これはどうしようもないと思ってますが。

## (2) 今後の日程について

○会長 特段よろしければ、スケジュールの話も出ましたので、今後の日程等も事務局から説明をいただいて、さらにまた御意見をいただければと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○事務局 それでは、資料6ページをごらんいただきたいと思ひます。一番最後のページでございます。今後のスケジュールということですが、太線のところをごらんいただきたいと思ひます。

本日、第3回の協議会を実施いたしました。第4回の協議会を来年の2月に開催をしていきたいと考えております。内容につきましては、本日皆様からの意見を踏まえて素案を示して、それについて御意見をいただきたいと思ひております。

5月には、修正したものをホームページにて御意見をいただく、パブリックコメントを実施していきたいと思ひております。

7月から8月にかけて第5回の協議会を開いて成案を決定していきたいということで、9月に県教委に木曾地域における高校の学びのあり方と具体的な姿を提言していきたいと思ひております。

先ほどお話もありましたけれども、委員の皆様にはそれぞれ役職があつて、3月までという方が多いと思いますが、そのまま継続していただけると議論も継続できてよいと思います。無理な場合は引き継ぎをお願いし、継続というか議論をつなげていっていただきたいと思っています。

○会長 県の高校改革の方針の中で、この木曾地域は今回の再編計画の方向では再編を前提とはしていないという地域になっていますが、内容的なものでどうあるべきかという声をしっかりと県へ届けるという、そういうこの協議会の使命があると思っていますので、今第4回を2月に開催させていただいて、その前段で今日の御意見、また今回お示しをした2ページのもの、主な意見の4本の柱になるのか、3本くらいにするのか、そこら辺は別としても、素案的な議論のたたき台的なものを事前にお示ししながら、第4回の中でもっとこういうことを加えたほうがいいのではないかとか、そんな御意見をいただきながらということになりますので、2月、3月の間であれば、特に転勤とかPTAの役員の変更もまだという状況でもありますので、2月に1回だけではなくて、場合によってはもう4回、5回というような、そういった協議会があつても、皆さんの御意見をいただきながら進めていけばいいと思っていますが、秋には何とか県教委に提言をしたいというような、そんな1つの目標を持ちながら、進めていくということでもあります。

慌てる必要もないと思っていますので、いろんな御意見があつて、今までの5回の御意見なり、また今日出された御意見、地域の皆さんにもどうお返しをしていくかということも大きなテーマになるのかなど。パブリックコメントという言い方がありますけれども、多くの皆さんにこういった協議に参加をしていただくためには、もっとほかに方法があるのかどうか、そこら辺も含めて次回の素案ができた段階で、御意見もいただければいいと思いますが、こういった進め方の関係で皆さんの中で御意見がありましたらお伺いしたいと思っています。

そんなことで進めさせていただきますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

### (3) その他

○会長 その他は何かありますか。

○委員 生徒とのコミュニケーションというお話をさせていただいたんですが、何をまず話していただいたかというのと、先ほどから皆さん言われているように、自分の学校の魅力だったりとか、そういったものを発信できるかどうかという部分で、私は昨日これは会社の用事ですが、蘇南高校に行かせていただいて、進路の先生のお話をいただいたりですとか、これからまた生徒さんのほうも伺わせていただくんで

すが、私も青峰高校、当時は木曾高校ですけれども、の出身で、多分もう10年くらいたつのかな。何が言いたいかというと、青峰高校が蘇南高校の建屋に比べてすごく汚いんですよね。みすぼらしく感じてしまうんです。昨日、蘇南高校に出かけさせていただいて、すごく床も磨き上げられて、生徒たちが自分たちで何かやっているんだらうなという気がしたんです。

県の方がいらっしゃるのでお伺いをしたいんですが、なかなか学校側がお金を出してもらえないじゃないですか。生徒と何が話したいかというと、生徒たちがどんなところにお金が必要だと思っているかという部分で、例えば青峰高校の建屋を全部建て直すなんてことは不可能ですが、外階段の手すりを塗装するとか、テラスのタイルを補修するとか、そんな程度で見ばえって全然違ってくると思うんですね。

生徒に提案したかったのが、地元の企業に出資を募ってみたらどうかと、そういうお話をしてみたいと思っているんです。そういう民間からのお金を県の所有物に使っていいかどうかということをお伺いしたいと思うんですが。

○**県教委** 今のお尋ねですが、よくありますのが、PTA作業ということでPTAの方々が作業していただいているとか、生徒みずからが行うということで、材料費とか例えばタイルを張るとか塗装を塗るというような部分については、県でも補助しているというようなことはございます。

民間企業でというのは余り例がございませんので、いろんなルールの中で厳しいのではないかと考えています。

設備につきましては、毎年各高校から要望を聞きまして、予算に限りがあるものですから、可能なところは修繕しているというようなことになっています。

○**委員** そうすると、地域の民間企業が地域の学校に対して投資をするというような考え方なんです、企業からすると。そういうことをして、例えば全国に募集をするとかいうことをしてみても、汚い学校には誰も来たいと思わないですよね。子供たちの目線ですよ。学びたいことがあったり、特色のあることがあったりして魅力を感じたとしても、学校に来てみたら取り外したバスケットゴールがそのまま放置してあったりだとか、そういう状況なんですね。そこに例えば募金を募ってというようなことを生徒主導でやらせてみたいと思ったんです。それがだめですと言われると、もくろみが崩れてしまうので、だめですと言ってほしくなかったんですが。

○**県教委** その辺のところは今日明快な答えができませんので、また確認しまして、次回か何かに御返事させていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

○**委員** お願いいたします。

## 5 閉会

○事務局 第4回会議でありますけれども、2月に予定をしております。日程等を調整しまして、追ってまた通知をさせていただきたいと思えます。

以上をもちまして、考える協議会第3回を終了させていただきます。本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。

午後 8時00分 閉会